

# 110年前の世界旅行を祖父とともに

加61 泉 優佳理



## 遺された数百枚の葉書

私は現在科学技術コミュニケーションシジョン研究所の代表として、科学や技術の専門的な内容を、専門が違う方々、もしくは一般の方々にわかりやすく伝えるための伝え方の研究と実践をしています。

私が科学技術コミュニケーションに携わりたいと思ったのは東日本大震災の時です。原子力発電所の事故に関して、専門家の説明をテレビ等でたくさん見聞しましたが、内容が難しく、単語さえもわからないことがあります。ただでさえも、何が起きているかわからなくて不安な時に、わからない言葉で伝えられる

ことで周囲の人がより不安になっていました。専門家の方々に、私にもわかるように伝えて欲しいという願いが、現在の仕事の出発点です。

私は東日本大震災の翌年に九州工大の大学院博士後期課程に社会人入学し、科学技術コミュニケーション、リスクコミュニケーションの研究を始めました。いわゆる昨今言われる「学び足し（リカレント教育）」です。自分自身の理系としての伝える側の経験と、一般市民としての伝えられる側の経験が、科学技術コミュニケーションシジョンの分野で合体したと感じています。

最適な伝え方は聞き手や個々の状況で違いますが、伝える側がいくつかの留意点を知り、少し意識するだけで、伝わり方はずいぶん変わると考えます。

そこで、企業や行政の方には、具体的な伝え方のヒントをお伝えしています。また、「私は文系だから、理系のことはわからない」と言われ

る一般の方々には、科学や技術のことに親しんでもらえるように、市民向けの講座で、「金は何故大切にされるのでしょうか」「家をすっきり片づけながらSDGsしましょう」「知っていそうで知らないニュースの言葉」等のタイトルでお話ししています。

さて、私の「お宝」は、私だけにしか価値がないものかもしれませんが、100年以上前の祖父由来のたくさんのお葉書です。



フランス到着を留守宅の母親へ知らせた絵葉書(1907)

97年の八幡製鐵所開業時に東京から八幡に赴任し、生涯を製鉄技術者として過ごしました。祖父の遺した葉書は、祖父がフランスの製鉄所を中心に1年半の海外出張をした時に留守宅に宛てた葉書や、祖父が受け取った様々な方からの葉書です。

葉書の文面は達筆で書かれているために判読が困難ですが、多くの人の想いがぎゅっと書き込まれています。また、祖父が国内外の行く先々で集めてきたと思われる絵葉書や当時の風刺葉書、日本郵船の乗船記念葉書等も多数あります。葉書や祖父の思い出の品々は、私が大学を卒業した頃に今は亡き父から整理を頼まれて託されたものです。しかし不肖娘は人生の諸事雑事に追われて、内容すら確かめることもなく長い歳月を過ごしてきました。

ところが、新型コロナウイルス問題で時間の流れ方は激変し、私が家で過ごす時間が増え、ようやく祖父、そして父が遺した品々と向き合うこととなりました。いったん向き合い始めますと、色々な疑問が起り、疑問解決のために様々な方法で調べることとなりました。祖父の人生調べに端を発したさまざまな謎を解く、



祖父が母親へ宛てた葉書の数々の判読に四苦八苦しています

さながら歴史ロマンミステリーのよ  
うな時間を今、過ごしています。

### 明治時代の海外渡航

たくさんある葉書の整理は、「差出人が祖父で、受取人が留守宅」の葉書を集めるところから始めました。なぜならば、祖父自身が書いたものを基に、明治時代の海外への旅を、まず知ってみたかったからです。

祖父の海外出張は、1907年(明治40年)～1909年(明治42年)。主な滞在先はフランスのル・クルーゾという製鉄所のある街でした。ここ



祖父が主に滞在していたフランスのルクルーゾの駅と工場近くの様子と思われる絵葉書

には現在もアルセロール・ミッタ爾連の特許鋼の工場等があるようです。明治時代の有名な海外渡航として

は、森鷗外がドイツ留学に出発したのが明治17年、夏目漱石がイギリスに留学したのが明治33年等で、「ふらんす物語」を書いた永井荷風はまさに祖父と同時期にフランスに滞在していたとわかりました。

明治41年には、朝日新聞社が企画した第1回世界一周会という初の世界一周のツアー旅行が行われました。明治42年には洪沢栄一氏を団長として全国の実業家たちが約3カ月で53都市を訪問したそうです。様々な人が世界に目を向け、足を運べる時代になっていたと考えられますが、それでも、海外渡航は現代に比べてずっと稀なことだったと思います。新型コロナウイルス問題で海外が遠くなった時に、古い葉書から過去に遡り、心だけ海外に向かっている自分が不思議でもありました。

### 製鉄技術者になった祖父のこと

祖父の葉書を調べて始めて最初の疑問は、そもそも渡航時に祖父は何歳だったのかということでした。亡くなった日は家に残る位牌に記されていました。誕生日は書かれていませんでした。そこでまず戸籍を取り寄せて祖父の生年月日を知りました。

誕生日がわかると、他の情報を入れ込んでいく祖父の年表が作れます。父の遺品の中に祖父の卒業証書やパスポート、製鉄所での職歴書等が入っている箱を見つけた時は、まさに情報のお宝箱発見だと、小躍りしたくなりました。そしてお宝箱の資料によって祖父の歩みがわかり始めました。

祖父、一本木清三は現在の山口県萩市に生まれ、東京の工手学校の採鉱学科、冶金学科を卒業しています。卒業証書には、後に明治専門学校校長をされた場中先生のお名前が採鉱学科教務主理として書かれています。冶金学科の教務主理は後に八幡製鉄所の操業に多大な貢献をされた野呂景義先生でした。工手学校は夜間に授業が行われていたそうですが、その理由は、昼間に東京帝国大学等で教えておられる先生方が、夜間に授業ができるためと言われ、当時の日本の人材育成のための意気を感じます。

帝国議会は1896年3月に製鉄所の創立を決定しますが、同年に祖父は製鉄所に採用されています。翌1897年2月、製鉄所を八幡村に設置することが決定し、6月1日に



祖父が受け取った同僚・知人からの葉書のごく一部です

八幡村に製鉄所が開庁されました。祖父の職歴書によれば、5月14日に八幡製鉄所赴任とありますので、祖父はまさに八幡製鉄所の立ち上げに最初から関わってきたわけです。そして八幡東区のスベースワールド駅近くにある高炉のモニユメントに掲げられている「一九〇一」年には、祖父は原料掛長をしていたようです。1907年9月、溶鑛掛長だった



祖父が受け取った葉書には、余白も惜しむようにたくさん文章が書かれていて、海外にいる者同士、どれだけ伝えあいたいことがあったかを感じずにはられません

祖父は製鉄研究のためのフランス出張を命じられました。祖父は1909年3月に帰国するまで、フランスのル・クルーズの製鉄所を拠点とし、ベルギー、ドイツ、イギリス等の製鉄所も訪れたことが葉書の文面からわかりました。祖父の留守宅（母親宛）への葉書には、最初は言葉に不自由したがその後慣れてきて問題無く過ごしていること、次の訪問先のこと、お金が無い貧乏旅行ながらイタリア等に行ったことが記されています。同時に海外に滞在されていた方々からの祖父宛の葉書には、自分の留守中に操業が順調に進んでいるらしいこと

とや、とにかくお金が無いというところ、製鉄所の周辺は何もなく生活にはすぐ飽きるなどが書かれています。絵葉書の表面のみならず、裏面の写真の空の部分までもぎっしり書かれている葉書からは、異国の空の下での高揚感や孤独、不安を感じずにはられません。

### 祖父は何故、フランスへ

明治時代、日本は製鉄技術を主にドイツに学びました。アドルフ・レーデブル教授がおられたドイツのフライベルグ鉱山大学では多くの留学生が学びました。前述の野呂景義先生は1886年入学、的場中生も1890年に入学されています。また、1900年代初頭、製鉄技術者は、ドイツのグーテホフニングスヒュッテ（GHH）社に派遣されていたにも拘わらず、祖父はフランスのル・クルーズの製鉄所に派遣されています。その理由を祖父の葉書や他の資料から探っていくうちに、祖父の同郷の先達、曾禰荒助氏のこととが浮かびあがってきました。曾禰氏は長州藩の家老の血筋で、戊辰戦争では小隊長を務め、明治維新後は政界に転じ、日露戦争時代に

大蔵大臣として戦時下の苦しい財政を支えた方です。全権公使として長くフランスにも滞在されています。「東京の曾禰様」として祖父の葉書に登場する曾禰氏は、いくつかの書類から察するところ、祖父の大恩人であることは間違いないと思われます。しかし同郷というだけで祖父をかくも助けてくださったとは考えられません。幾つかの推測をもって、曾禰氏の生涯を文献等から追い、つながりを調査中です。

曾禰荒助氏のお墓は東京の青山霊園にあるとわかり、コロナ禍の波の間に墓参させていただきました。大きな花束を抱えて見も知らない人がやってきたことを、もしお墓の中の曾禰氏がわかったならば、きっと怪訝に思われたでしょう。霊園には、山川健次郎先生の眠られる山川家のお墓や名だたる科学・技術分野の方々のお墓もあり、それぞれのお参りもさせていただきました。

明治時代、ドイツのフライベルグ鉱山大学に留学していたのはほとんどが工部大学校・東京帝国大学の卒業生で、研究者として、経営者として日本の中核をなしていた人々です。また、世界一周旅行のツアー参

加代金は、現在の貨幣価値に換算して約1千万円という試算もあります。そんな時代に海外で過ごせた1年半は、祖父の人生の中でもかけがえのない時だったようです。祖父は製鐵所を定年退職して間もなく、私の父（実際は祖父の甥。養子となっていました）が中学生の時に他界していましたが、父は幼い頃からよく祖父から海外で見聞したことを聞いていたそうです。祖父は、知性を大切にしないさい、論理的に考えなさい、そして紳士であれと繰り返し言っていたそうです。祖父の言葉は、明専の求める人物像である「技術に堪能なる士君子」に通じていると思います。

今だからこそ調査できる

祖父のことは、八幡製鐵所の宿老・児玉藤八氏について書かれた志摩海夫氏著「鐵の人」（昭和18年発行）に登場するエピソードから、人柄を知ることができます。そして祖父の遺した葉書を出発点にした私の好奇心の旅先はどんどん広がっていきます。

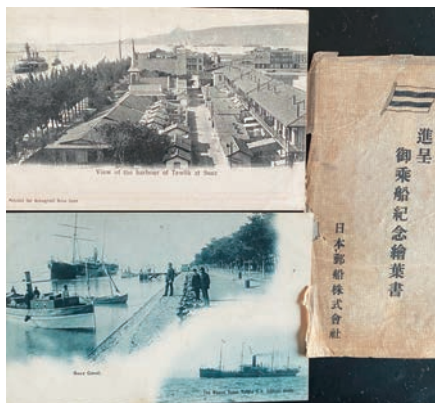
祖父が海外で得た知見が業務上でどうつながったのかという技術史、祖父の頃の国内外の移動手段は何か

という交通史、祖父の葉書の宛先から知る製鐵所の社宅史や当時の物価のこと、祖父に葉書を送ってくれた方々の仕事、恩人曾禰荒助氏のこと、先祖調べの中で知った、天覧台風と言われる災害で亡くなった薄幸の女性のこと等、知りたいことにきりがありません。

私に限らずご先祖様のことや諸々のことを調べておられる方もいらっしゃるかもしれませんので、私が調べている方法を少し書かせていただきますと思います。手元にある資料は非常に限られていますが、次のような方法でできるかぎり情報を集めました。

- ① 戸籍を取り寄せる
  - ② 古文書館等で資料を閲覧する
  - ③ 博物館などの展示を見に行く
  - ④ インターネットで検索する
  - ⑤ 国会図書館のデジタルアーカイブ等で調べる
  - ⑥ 図書館に文献調査を依頼する
  - ⑦ 企業博物館へ問い合わせをする
  - ⑧ 知人から貴重な情報をいただく
  - ⑨ できるだけ足を運んで調べる
- ④～⑥は、インターネットがある現代だからこそ容易にできることです。私の父が生前に調べようとして

も困難を極めたと思います。⑦の企業博物館への問い合わせでは、横浜にある日本郵船の博物館のご協力で、祖父が乗った船の名前がわかりました。そして当時の航路の時刻表と葉書の消印を参照することから、祖父の船旅を追うことができました。



当時の旅の状況も、日本郵船の乗船記念葉書等よりわかります（往路のスエズ運河）

⑧に関しては、市民向けの八幡製鐵所の歴史についての講座を受講し、講師の九州国際大学名誉教授の清水憲一先生に祖父に関する大変貴重な情報をいただきました。また、東北大学名誉教授の日野光元先生には日本の製鐵史と海外との関わりの点で多くの知見をいただきました。日野先生とは10年前、ドイツ・ドレスデンでの学会で初めておめにかかり、ドレスデン近郊のフライベルグ鉱山

大学見学にもご一緒し、現在も交流いただいています。日野先生の東北大での講座の初代教授、大石源治先生は、八幡製鐵所在職のご経歴もあり、イギリス留学中には、祖父に葉書を送ってくださいました。私の九州工大写真部時代の同級生の澤原一成君には、祖父の時代の鉄道網について詳しく調べていただきました。萩のお寺の関係者をはじめ、情報をいただいた方は他にもたくさんおいでです。

インターネット、データベース化という現代の技術と、人生の様々な場面で出会った方々とのありがたいご縁によって、今だからこそできる謎解きは進行中です。

私が、もしも九州工大で金属工学を学んでいなければ、祖父のことを調べてもここまで身近には思えなかったでしょう。大学で習った鉄造りのことは、悲しいほどに忘れ、もう頭の中で錆びびっている不肖の身ですが、10年前の鉄造りに関わる旅を祖父と共に、今楽しんでいきます。この幸せこそが私の自慢です。（明専会理事・科学技術コミュニケーション研究代表）



エッフェル塔とセーヌ川、ブローニュの森、モンマルトルの丘など、当時のパリの様子も絵葉書からわかります



思わず目をみはる絵葉書もたくさんあります



帰路は大西洋を渡りアメリカ横断後、太平洋を渡るルートで、ニューヨーク、ナイアガラの滝、ピッツバーグのカーネギー製鉄所等祖父が目を見張ったと思われるアメリカ各地の絵葉書も遺されています



(上)1930年(昭和5年)  
洞岡第一溶鉱炉  
火入れ記念

(下)1925年(大正14年)  
タルボット炉  
出銑記念



帰国後、1913年北海道・輪西製鉄所の溶鉱炉の吹立指導で出張した際の日本郵船北海道樺太航路の乗船記念葉書